



OVERSEAS

Mongolia —モンゴル国—

海外事情



モンゴル国の生活と風習



松島 秀夫 MATSUSHIMA Hideo
大日コンサルタント株式会社 / 海外事業部 / 専任技術参事

工事監理として

モンゴル国の建設工事の橋梁・土木構造物担当工事監理として、2014年4～11月と2015年3～10月の期間ウランバートルに派遣された。住まいはウランバートル、仕事はウランバートルから約50km南に位置するズーンモド近くの建設現場という生活である。そこで見て聞いて感じたモンゴル国の生活と風習を紹介する。

モンゴル国

モンゴル国は北をロシア、他3方向を中国と国境で接している内陸国であり、国土面積は156万km²、人口は300万人で世界で最も人口密度が低い。大統領制と議会制民主主義を採用し、4年に一度選挙がある。主な宗教はチベット仏教で、ウランバートル市内にある仏教寺院の一つのガンダン寺には毎日多くの人々が参拝している。寺院の中に高さ約26mの観世音菩薩像がある。

1206年にチンギスハーンが史上最大のモンゴル帝国を築き、1271年にその孫であるフビライハーンが元を築いたが、その後のモンゴルは中

国の清の一部になった。モンゴル国はチベット仏教の指導者ボグドハーンが1911年に独立を宣言したが、ロシアと中国の干渉によって1915年、外モンゴルは自治領に、内モンゴルは中国領になった。1922年にソビエト社会主義共和国連邦が成立した2年後、外モンゴルは世界で2番目の社会主義国家であるモンゴル人民共和国になり、1945年に独立

が国際的に認められた。ソ連が崩壊すると、1992年に新憲法を採択して社会主義を放棄し、国名をモンゴル国に改めた。

日本とモンゴルの関係としては、1939年に満州国の関東軍とモンゴル人民共和国との間で国境線を巡る争いが起き、日本軍とソ連軍が戦ったノモンハン事件が起きた。戦後、ソ連が抑留した日本兵捕虜がモン



写真1 ガンダン寺の観世音菩薩像



写真2 ウランバートル近郊の雪景色

写真3 ウランバートル駅

ゴル国にも引き渡され、強制労働に従事させられた。

首都ウランバートルと厳しい気候

名古屋の中部国際空港から韓国ソウルを経由し、6時間で標高1,350mの首都ウランバートルに到着する。成田空港からは5時間の直行便がある。モンゴル国は大陸性の厳しい気候で、冬は寒くて長く、夏は暑くて短い。強風や嵐のためウランバートル空港に着陸できないこともあり、4月中旬までは現場に行く道路は真っ白である。

乾燥した気候なので静電気がよく起こる。こうした気候と巻き上がる砂ほこりに加えて、インドや中国とならば大気汚染のため、鼻・のど・気管支の炎症を起こしやすい。のど薬の持参、うがいや水分補給、マスクの着用が必須である。

食事

モンゴル料理はラム肉、馬肉、牛肉、ヤギ肉と、それらの動物から作る乳製品が主体であり、野菜料理はあまりない。事務所の昼食は、週2日は代表的な料理のボーズとホーショールであり、モンゴル人はおいしそうに食べている。ボーズは蒸し

て作り、大きさや形が餃子に似ているが、ラム肉を使い油がたっぷり入っているため、餃子とは味が違う。ホーショールは幅20cm位の扁平形の揚物で、中身はラム肉と油でボーズの親戚のようなものである。モンゴル人は焼うどんや焼きそばに似たツォイワンも好きだが、ラム肉の油がたっぷり入っている。

事務所でお祝いがあった時は、ホルホグという料理を頂いた。直径40cm位の鍋の中にラム肉と野菜、熱した石を入れ、外からも熱した料理である。

ウランバートルには多くの日本食レストランがあり、日本食材も売っているノミンデパート、メルケリ市場、エブリデイ(スーパーマーケット)等がある。生活し易いが、日本の生鮮食材が入手できないのが残念だ。なお、飲料水は市販のペットボトルの水を飲むことにしている。

言語と民族

人口のおよそ95%がモンゴル族、5%がカザフ族である。カザフ族とモンゴル族の人では顔つきが少し違う。

公用語はモンゴル語である。以前はロシア語が第二言語として学習さ

れていて、事務所にいる40歳以上はロシアの大学の出身者が多く、英語が話せない人が多い。今は第二言語として英語が学習されていて、事務所の40歳以下は英語を話す。文字はキリル文字(ロシア語のアルファベット)が使われており、英語のアルファベットとは違うためなかなか読むことができない。また昔は、漢字の草書に似た縦書きのモンゴル文字が使われていた。

モンゴル人の男性は身長180cm位、女性は身長170cm位の人が多く、中年になると腹が出てくる人が多い。大相撲のテレビ放送はNHKの相撲放送をそのまま放映し、解説の場面だけモンゴル語となっているので、「ヨコゾナ」「オオゼキ」という単語はモンゴル語になっている。

国際列車

ウランバートル駅はシベリア鉄道の国際列車停車駅である。駅舎には免税店があって国際駅である。駅にはロシアに行く客車とモンゴル国の主要な輸出品である石炭を積んだ貨物列車等が入線するが、ホームとホームを結ぶ跨線橋がないため移動が不便である。

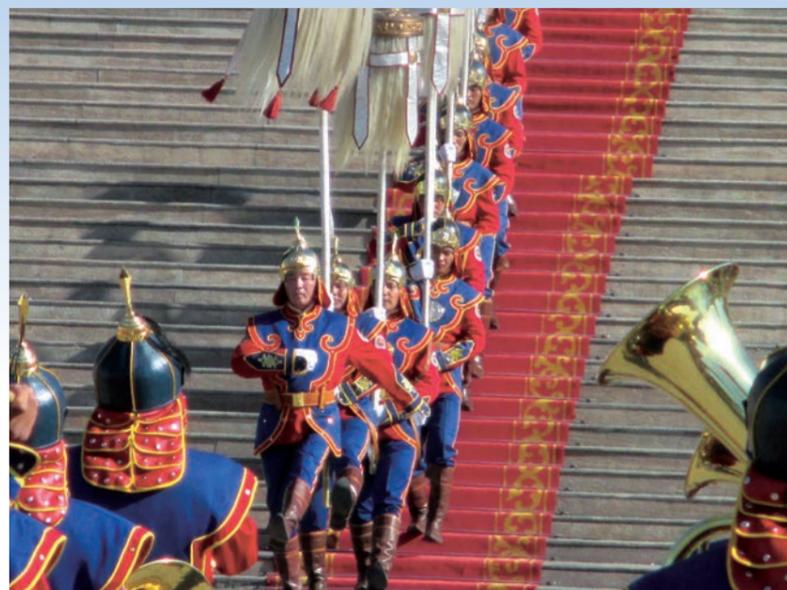


写真4 騎馬隊の騎乗前行進



写真5 白い綿毛がいっぱいのロシアポプラ



写真8 乗馬体験

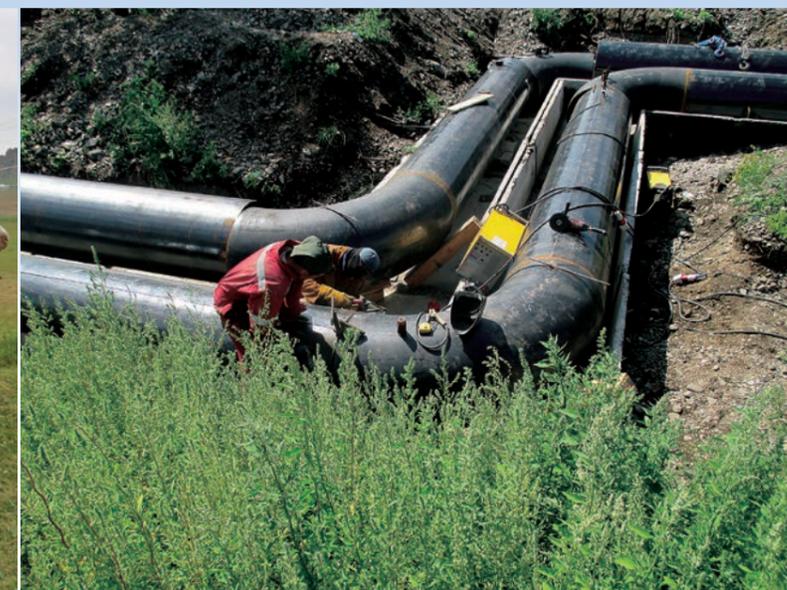


写真9 ヒーティングパイプ取り換え工事



写真6 羊とヤギ



写真7 モンゴルの牛

祭り

毎年7月11～13日の3日間は国民の祝日で、ナーダム祭りが開催される。ほとんどの放送局でモンゴル相撲、子供競馬、弓矢の競技が3日間放映される。特に、7月11日チングス広場（旧スフバートル広場）から国立競技場までの騎馬隊のパレードは圧巻である。

白い綿毛

6月中旬から7月初めまでの間にウランバートルを訪れた人は、空を飛

ぶ白い綿に驚く。ロシアポプラと言われる木から、花粉のような綿毛が大量に撒き散らされる。この時期、街中は綿毛で真っ白になる。寒さに強いこの木は、ウランバートルのいたるところに生えている。果実が割れるとタンポポの白綿よりずいぶん大きい直径2cm位の綿毛になり、それがなんと鼻の穴にすっと入り、気分が悪くなる。マスクをするか、口や鼻を押さえて歩く必要がある。

動物

モンゴル国はもともと遊牧民の国

で、家畜の数が多し。羊2,000万頭、ヤギ1,900万頭、牛290万頭、馬260万頭、ラクダ32万頭いると言われ、ヤギの毛はモンゴル国の主要輸出品であるカシミヤになる。羊、ヤギ、牛、馬は日本や東南アジアと比べるとずいぶん毛深い。

建設現場や山中には野生のリスやウサギ、美しい野鳥がいる。ウランバートル市内ではハト、カラス、スズメ、ツバメを見ることができる。犬は放し飼いが多く、体長70cm位の大型犬で、牧羊犬として使われているおとなしそうな黒い犬が多い。最

近、犬のペットが増えているが、猫はあまり見かけない。

ゲルでの生活とウランバートルの生活

テレルジ国立公園は最も人気のある観光地の一つであり、見渡す限りの草原の中とところどころ岩山が見えるのが魅力である。ウランバートルから東へ70km、車で約2時間の距離にあり、亀の形をした岩が有名である。

ゲルの生活と乗馬体験に参加した。なお、ゲルのことを中国語ではパオという。

ゲルの中には2つのベッドがあり、夫と妻がベッドに寝て、子供は真ん中の土間で寝る。入り口は南側にあり、北側には仏壇が置いてある。外に穴を掘って囲んでトイレにし、そこがいっぱいになると埋めて、また別の場所を掘って作り直す。エコであるが臭い。乗馬体験のコースはゲルから亀岩までの往復6kmだった。乗馬ツアーは草原を30km位走るそうで、好きな人にはたまらないだろう。

ウランバートルでは10月～翌5月

初めにかけて、発電所で約260℃に加熱した熱水をヒーティングパイプでアパート等に供給する温水暖房システムが標準となっていて、各戸への温水の供給も行っている。札幌にいた時の煙突付き石油ストーブより快適である。問題は年に一度、6～8月頃の約2週間、維持管理のために温水が止まることである。

モンゴル人は冬の間、ウランバートル市内の高層建物にいますが、夏季はウランバートル郊外の一軒家の別荘に住む人が多い。市内の一軒家に住む人は、家の横にゲルを建てて人が多い。基本的に草原やゲルが好きな国民である。

オボーと土葬

モンゴル国の道路を走ると、高さ4m位の飾りに覆われた標柱が多く見える。これは「オボー」という祠的なもので、山の上に作られていて旅の安全を祈るところである。死者を土葬にする習慣があるため、毎週月曜日と金曜

日、道路には死者を墓場に運ぶ車列が現れる。

文化等

ウランバートル市内には、サーカス、オペラ・バレエ劇場、モンゴル相撲等の施設がある。モンゴル民族舞踏は必見であり、馬頭琴という民族楽器で演奏される。これは弦が馬の尻尾から作られた二弦の楽器である。

最後に、広大な大地や砂漠で生活するモンゴル人の、日本とは全く違った文化、自然、生活、習慣に感動した。



写真10 民族楽器の演奏